

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
84	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
<b>題名 (原題/訳)</b>	
Gambling, disordered gambling and their association with major depression and substance use: a web-based cohort and twin-sibling study ギャンブル、障害性ギャンブルおよびそれらの大うつ病、薬物乱用との関連：Web にもとづくコホートと双子・同胞研究	
<b>執筆者</b>	
C. Blanco <sup>1</sup> , J. Myers <sup>2</sup> and K. S. Kendler <sup>2,3*</sup>	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b>	
Psychological Medicine (2012), 42, 497–508.	
<b>キーワード</b>	
アルコール、抑うつ、ニコチン、病的ギャンブル、双子	
<b>要 旨</b>	
<p><b>背景：</b> ギャンブルの頻度および障害性ギャンブル (DG:病的ギャンブル[PG]を含む、ギャンブル関連の問題をすべて包括する病態) に及ぼす遺伝・環境要因については解明されているものは比較的少ない。</p> <p><b>方法：</b> Web にもとづく抽出集団で以下の評価を完了した 43,799 人 (609 の双子ペアおよび 303 の同胞ペアを含む)：生涯ギャンブル回数、PG の DSM-IV 基準、アルコール、ニコチン、カフェイン摂取、ニコチン依存 (ND) と生涯大うつ病 (MD) の DSM-III-R 基準。双子モデルは Mx を用いた。</p> <p><b>結果：</b> コホート全体において、DG の症状が liability の最も重要な要素であった。DG の症状はカフェイン摂取とは弱く、MD・喫煙・飲酒・ND とは中等度に関連していた。双子および同胞ペアの検討においては、家族内でみられたギャンブル回数の類似は、家族—環境要因 (<math>c^2=42\%</math>)、および家族—遺伝要因 (<math>a^2=32\%</math>) の両者に由来していた。一方、DG 症状の家族内類似はもっぱら遺伝要因に由来していた (<math>a^2=82\%</math>)。Bivariate 分析によると DG 症状と MD との遺伝的相関は低い (<math>r_a=+0.14</math>) 一方、DG 症状と遺伝要因との相関はアルコール、カフェイン、ニコチン使用および DN とにおいてはるかに高かった (+0.29 から +0.80)。これらの結果は性による違いを認めなかった。</p> <p><b>結論：</b> ギャンブルへの参加は、環境・遺伝の両因子によるものであったが、DG 症状はほとんどが遺伝的な潜在因子により規定されており、内在化より外在化する行動様式との関連が強かった。この結果に性差を認めなかったことは、DG の病因は男女とも同様であることが示唆された。</p>	